



主日礼拝説教 — 2017年2月5日

み言葉が力を発揮しない理由

聖書 ヨハネによる福音書 5章31～47節
コリント信徒への手紙1 1章18～25節
武田 真治

1、証拠を示せ！

今日の箇所は「もし、わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない。わたしについて証しをなさる方は別におられる。」(31～32節)というイエス様の言葉で始まっています。これまでこの五章には出てこなかった「証し」という言葉がここから急にたくさん登場して来ます(11回)。ここから想定されていることは、これまでイエス様が神様から遣わされた救い主＝神の子であるということをイエス様ご自身が語ってこられました。それに対して、聞いていた周囲のユダヤ人たちから、そんなに言うなら、その証拠を示せ！と言われたのではないかとことです。この「証し」という言葉は《証言》ということだからです。

当時の裁判は、今のような指紋照合やDNA鑑定などの科学的捜査はありませんから、目撃証言や弁護証言が何より重要であり、決め手になっていました。従って、証拠を示せと言われるならば、出来るだけ多くの証言を示すことになったのです。

まずイエス様は「わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない。」と言われていました。これは、自分で、自分は嘘を言っていない、といくら言っても、それは何の弁護や証拠にはならないという意味です。その通りですね。むしろ後ろめたい気持ちのある人ほど、神様に誓って本当だ、などと言うものです。

その上で「わたしについて証しをなさる方は別におられる。」(32節)と。そしてこの言葉の通り、ここから三人(三つ)の《証言》を紹介しておられるのです。イエス様が、周囲の批判や反論にちゃんと答えておられることがよく分かります。

2、洗礼者ヨハネの証しと奇跡の業

まず挙げられているのが洗礼者ヨハネの証言です。即ち「あなたたちはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。」(33節)と。

ユダヤ人たちの間で、ヨハネは預言者と呼ばれて尊敬を集めていました。その彼はイエス様のことを「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」(1章29節)とまさに《証言》していたのです。その意味で、彼の言葉は真の救い主を指し示す「燃えて輝くともし火であった。」(35節)のでした。実際に多くのユダヤ人たちが彼の元へ行き、悔い改めの洗礼を受けたのでした。それは「あなたたちは、しばらくの間その光のもとで楽しもうとした。」と指摘しておられる通りでした。そのヨハネの《証言》を信じていれば、イエス様が神の子だと受け入れられるはずではないかと(実際にはもうヨハネは亡くなっていました)。

次の《証言》として「しかし、わたしにはヨハネの証しにまさる証しがある。」(36節)と 言われて、挙げられたことが「父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業」「が、わた





しをお遣わしになったことを証している。」でした。つまり、イエス様が為されている奇跡や人々を救われる行為だと。神の子でなければとうてい、それらの業を為すことが出来ないという点が《証言》になっていると。確かに、それらはヨハネの証言以上に、目に見える形で《証拠》になっていると言い得ます。

3、神様ご自身の「証し」とは？

そして三番目の証言者が「また、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをして下さる。」(37 節) です。まさに神様ご自身が、イエス様こそ神の子であることを《証言》して下さると！

さあ、ここが問題です。ここでイエス様が仰っておられる〈神様の証し〉とは、いったい何のことでしょうか？

実は二つの解釈があります。一つは、神様の《天からの声》という解釈です。例えば、イエス様が洗礼を受けられた時に「そのとき、『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』と言う声が、天から聞こえた。」(マタイ 3 章 17 節) ことや、山上の変貌の時にも「雲の中から声がした。『これはわたしの愛する子。これに聞け。』」(マルコ 9 章 7 節) などのことです。これも確かに《証言》と言い得るでしょう。ただ、ここでイエス様が考えておられた〈神様の証し〉とはそれとは違っているように思います。なぜなら、この後、イエス様はこのように語っておられるからです。即ち「あなたたちは、自分の内に父のお言葉をとどめていない。父がお遣わしになった者を、あなたたちは信じないからである。あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。」(38～39 節) です。つまり、〈神様の証し〉とは「父のお言葉＝聖書」のことだと。この聖書が「わたしについて(神の子であると)証しをする」ものであり、まさに神様からの《証言》であるのだと言われているのです。

勿論、この場合の「聖書」とは旧約聖書のことです(まだ新約聖書は存在しませんでした)。当時、ユダヤ人たちはそれこそイエス様が言われている通り、一生懸命「聖書を研究して」いました。実際に、旧約聖書を研究することを仕事とする律法学者という職業の人達がたくさん存在していました。彼らも含めた聖書研究の結果、ミドラーシュとかタルムードと呼ばれる膨大な旧約聖書の解釈集が出来あがっていたのでした。そしてこの研究の果てに「永遠の命」に辿りつけると考えていたのでした。

しかし、イエス様は彼らのそのような聖書の読み方自体が、根本的に間違っていると言われるのです。それが原因で「あなたたちは、まだ父のお声を聞いたこともなければ、お姿も見たこともない。」また「自分の内に父のお言葉をとどめていない。」と、はっきり指摘しておられるのです。つまりは、こんなに膨大な聖書の研究をしても、まだ答えを見出せない、「永遠の命」に辿りつけないでいること自体がその証拠になっているのではないかと。

それに対して「聖書はわたしについて証しをするもの」だから、その「イエス様を証している」書物として読まないし聖書は分からないし、その背後にある「神様の声」も聞くことが出来ない。また、その神様の言葉も「自分の内にとどめられない」のだと言われているのです。まさに、イエス様が聖書の正しい読み方について、直に教えて下さっているとはいえるのです。





4、「信仰の書」として

以上のユダヤ人とイエス様との会話は現代の私達にも通じることではないかと思います。新約聖書も含めて、聖書は一冊の面白い読み物として、あるいは人生訓が記されている知恵の書として、またひとつの歴史書、文学書としても読まれています。そして、聖書に関する研究書もたくさん書かれ、出版されています。それらの読み方を止めるようにとされているのではありません。どのような読み方をされても自由でしょう。しかし、本当の読み方というものはあるのではないかとされているのだと思います。それは「聖書はわたし（＝イエス様）について証しをするもの」であるということでしょう。そこから読まないで「父（＝神さま）のお声を聞いたこともなければ、お姿も見たこともない」となってしまうと。そして「自分の内に父のお言葉をとどめていない」ということになる。少なくとも、聖書の本当の意味や力に触れることが出来ないということでしょう。

一月の最初に年頭祈祷会を三回に渡って持ちました。二名の信徒の方が「証し」＝《証言》をして下さいました。また、そのお話の後で出席者みんなが各々感想や新年の思いを述べ合いました。その中で幾人もの方が仰って下さったことは、苦しい時や辛い時にフッと聖書の言葉を思い出される、そのみ言葉によって何とか支えられて生きて来れたという、それこそ信仰の《証言》でした。それはまさに「自分の内に父のお言葉をとどめて」いるという証拠ではないでしょうか。聖書の言葉が身体の中に残っていて、何かの時に神様からの言葉として与えられる、示されるということであり、それこそ聖霊の働きだと思います。それは「聖書をわたし（＝イエス様）について証しをするもの」として普段から読んでいるから起こり得ることなのです。そのような神様の言葉として普段から受け止めているから、人生の様々な時に聖書の言葉が「自分の内から」湧いて出て来て、真のみ言葉としての力を発揮するのです。それが信仰者としての歩みであり、信仰者としての聖書の読み方ではないでしょうか？

逆に言えば、自分の中に聖書の言葉が「とどまっている」という事実があることは、私たちがイエス様を神の子、神様から遣わされた救い主であると信じている《証拠》となるのです。人からどれだけ、あなたはクリスチャンとは言えないとか、それでもクリスチャンかと非難されようとも、私たちが信仰者である《証拠》は、私たちの「内に父のお言葉をとどめて」いるという事実にあるのです。聖書のみ言葉を自分の体の血肉になるまで浸み込ませて行きたい。

（説教より抜粋、編集）

